



家康公の「和」の心

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねたか



駿府城三ノ丸東御門・巽櫓

家康公がその長い戦いの人生のどの時点で「日本に戦争の無い平和な時代をもたらすこと」を御自分の使命と感じられるようになったのかは解りませんが、その志は戦いに弄ばれた幼少の時代に芽生えて、絶え間ない戦いの日々の中で少しずつ育ち、壮年に達する頃には確固たる御自分の使命として感じられていたものと思われまます。

関ヶ原の合戦を勝ち抜き、公としては不本意であった大坂の陣を終えられ、旗印である「厭離穢土（争いの世界を離れ）欣求浄土（争いの無い世界を作る）」を達成された公は年号を「元和」と改めることで日本全国に「和」の時代の到来を宣言され、その三年後に亡くなられました。一生を掛けて公が造り出された平和な時代はその後二六〇年に亘つて続き、今日の日本の基礎となつたことは、皆様御存知の通りです。

家康公の「和」の志は代々の将軍によって継承されました。

世界の王朝史を読みますと、世の東西を問わず大体七・八代で暗君が出て世が乱れ、悪い宰相に実権を奪われて衰退に向かうと云うパターンが多いのですが、江戸時代の場合は八代将軍吉宗公が地震・津波・噴火・寒冷化などの自然災害、その結果起こった経済の悪化に立ち向かい、質素儉約の新しい世を作り出すことで今日の日本の基礎を固められていきます。最後の将軍慶喜公も悩みに悩まれたあと、家康公の心を戴して日本を二分する争いを回避するために大政の奉還に踏み切られました。

歴代の将軍達は将軍の居住区である中奥で明け六つに起床され、大奥に渡られて歴代の将軍の御位牌にお参りされた後、中奥に戻つて朝食後に衣服を改め、衣冠装束で再び大奥へ渡られて東照宮へ参拝されています。毎日欠かさずの行事でした。こうして家

康公の「和」の心は途絶えることなく継承されて、江戸時代の終焉を迎えたことになりました。

ある時ドイツの歴史学者と話していて、第二次大戦後の六七年の平和は有史以来ドイツにとって最も長く続いた平和であることを知りました。

日本は明治以降、西歐化することが文明化であるという大きな錯覚に陥つて来ましたが、人間の本来の文明と言うものが、まず人々が平和の中で、平等に楽しく暮らせる世の中を作ることでありと定義するならば、そろそろ今までは少し違った視点で物事を考える時になっていると思えます。

自然との調和を取り戻し、これ以上地球の与えてくれる数限りない恩恵を破壊しないで、大切に、大切に自然を守り、自然と共に生きる道を考えることが、家康公の「和」の心とも重なるものだろうと思つています。